

論文をつくる

神戸大学経済経営研究所 助教授

下村研一

自分の周囲で、特に何人かの外国人共著者が、研究論文の執筆をプロジェクトと呼ぶことが多くなった。英語の project は直訳すれば「研究課題」なので、どんな論文でも執筆はプロジェクトの遂行には間違いないが、この言葉は「難しい」か「時間がかかる」研究に用いて、そうでない「比較的易しくて時間もそれほどかからない」類いの研究はエクササイズと呼びたい気がする。

だが最近の自分の研究が「プロジェクト化」してきたのは、決して取り組む問題が大きくなってきたからではない。他の仕事が増えたとか年齢のせいで馬力が落ちたとかと言うよりも、研究年数が上がるにつれて、自分も周囲も批判的に考えることが非常に増えてしまったことが最も大きな原因である。論文についてどこからか批判的なコメントを頂戴するしないに関わらず、自分達で新たな批判をいろいろ想定してしまう。そうすると筆が進まなくなる上、書き直しの回数も多くなる。あまりいじりすぎると、読みにくい（同時に醜い）箇所が出てくる。そのような箇所は共著者との合意の上一瞬で削除する。長い間書き直しを重ねた苦勞は何だったのかと思う。

幼い頃、陶芸家が焼き上がった壺を惜しげもなく叩き壊す様子をテレビで見て強い衝撃を受けたが、院生時代ならば悦に浸っているであろう論文を共著者とズタズタにしあっては布をあてている姿はそれと似た様である。人によっては私達と同じような作業を延々と繰り返し一向に論文を完成させないため「完璧主義者」と呼ばれている方もおられるが、苦勞ばかりして形ある成果が世に出ないのは決して本意ではないはずだ。研究を仕事とするならば「寡作の人」であっても「不作の人」であってはならないだろう。

私もこれまでいくつかのプロジェクトをこのような過程を経て何とか完成にこぎつけてきた。できた論文を「コレ」と思うジャーナルに投稿し、数ヶ月して審査レポートが来る。改訂を要求されずに掲載に採択された経験は皆無である（ジャーナルによってはごくたまにあるらしい）。だが改訂が要求されると採択の可能性はかなり高いので、とても元気が出る。そして、最後のケース、不採択のレポートが届いたときは、小さなため息が出る。

友人でこのようなとき不採択の論文をそのまま他のジャーナルに即効で送る主義を貫いている者がいる（彼は同時に不採択にしたジャーナルの編集長には、審査をしてくれたことに対して丁寧なお礼の電子メールを送っている）。ここまで割り切れればいいのだが、私など不採択のレポートを読むと、そのレポートのコメントに基づいて改訂してから他のジャーナルに再投稿しようとする。おそらくこちらの方が多数派に属すると思う。

2人の共著者と私とで書き昨年9月に採択された論文は、執筆から採択決定まで10年かかった。それまで3つのジャーナルに投稿して不採択であった。共著者達も不採択のレポートを読んで改訂する主義だったので、レポートをもらう度に電子メールで反省会を開き改訂と投稿を行なったが、それでも落とされ続けた。ギリシャ神話に神様から「岩を山の上に運び続ける」という罰を受けたシーシュポスという男が出てくる。彼が山の頂上まで大きな岩を転がして運んでも岩は必ず谷底に転落してしまう。当時のわれわれの姿はこれに重なるものがあった。

「三度目の正直」と言うが、3回目の投稿で不採択だったときは完全に「終わった」と思った。それまではある程度以上の国際的水準のジャーナルに投稿していたが、このときは取り纏め役の共著者に「もうどこでも公刊されればそれで嬉しい」という電子メールに思いつくだけのジャーナル名を再投稿の候補として書き添えて送った。だが彼は3回目の投稿で不採択を下したジャーナルより高い技術水準を要求するジャーナルに再投稿した。私は「四度目の転落」を予想した。

ところが、予想はずれた。改訂と新たな問題の解決を要求する審査レポートが来たのである。転がると思っていた岩が、天から降りてきたか細い「蜘蛛の糸」によって静止した。ギリシャ神話が急に芥川龍之介の世界に変わった気がした。「この糸を切ったらおしまいだ。」私達は査読者の要求にすべて応えようと改訂を開始した。三人で分担を決めて、書き終わった者が他の二人に草稿を送るという作業を行なった。論文は最初のバージョンに比べ充実度を増した。こうして完成した改訂稿を送ったのが一昨年の9月のことである。採択の通知が来たのは丸1年後だった。その前日に別な論文の不採択通知を受け取っていたので、採択の喜びはひとしおだった。

この改訂の過程で新しい問題が見つかったので、共著者とはまたプロジェクトにしようかと話している。解決できるかどうか先はまだ何も見えていない。だが、たとえ10年後であってまた同じ喜びが得られる可能性があるのならやってみようと思っている。